はしがき

■**編集の趣旨**

この《10日で確認　新チェックノート》シリーズは、国語の主要分野について、短期間で集中的に知識の整理・確認をすることを目指して編集しました。

したがって、受験直前における知識の最終確認、少し早めの苦手分野の克服などに使用すると効果的です。

本書はこのシリーズの一冊として、古典文法の「助動詞・助詞」の重要事項をまとめました。

■**本書の特長**

1　学習日ごとにテーマを設けて、一日分を4ページに収めました。

2　上段には小見出しを付け、文法的意味と訳語も添えて、記憶すべき事項を一目で分かるようにしました。なお、※印の項目はやや特殊ながら注意すべき文法事項です。

3　中段は問題形式になっているので、必ず答えを書いてみて理解度を確認しながら、知識を定着してゆきましょう。

4　下段には項目ごとに、解説・補足やヒントなどを書いておきました。一通り目を通して、より確実に知識を積み重ねてください。

5　コラムで取り上げた識別は、最重要のものですから確実に身に付けましょう。

6　付録として、「助動詞活用表」「助詞一覧表」を載せました。

7　別冊解答書には、【解答】のほかに、【解説】と問題文すべての【口語訳】とを付けました。有効に利用してください。

本書によって、助動詞・助詞の重要知識が確実に身に付くことを期待しています。

編著者

《目　次》

第1日　過去・完了の助動詞 …… 4
第2日　推量の助動詞(1) …… 8
第3日　推量の助動詞(2) …… 12
第4日　打消・打消推量の助動詞 …… 16
第5日　断定・伝聞推定・願望・比況の助動詞 …… 20
第6日　受身・使役の助動詞 …… 24
第7日　格助詞 …… 28
第8日　接続助詞 …… 32
第9日　係助詞と係り結びの法則 …… 36
第10日　副助詞・終助詞・間投助詞 …… 40
付録　古典語助動詞活用表 …… 44
古典語助詞一覧表 …… 46

過去・完了の助動詞

①「き」の口語訳
　i　過去　…タ

※②　未然形「せ」

③「き」の接続特例

問　傍線部を口語訳せよ。

□　京より下りしときに、みな人子どもなかりき。　（土佐）

□　都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関　（後拾遺）

□　世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし　（古今）

問　次の1にカ変動詞、2・3にサ変動詞を、それぞれふさわしいかたちに改めてひらがなで入れよ。

□　人ふるす里を厭ひて［　1　］しかども　（古今）

□　わが身世にふるながめ［　2　］しまに　（古今）

□　うへの宮仕へ時々［　3　］しかば　（源氏）

⬆「き」は連用形接続（③の例外参照）。直接経験の回想に多く用いられる。

⬆《……せば、……まし》のかたちで反実仮想を表す。

⬆〈カ変〉こ―し　こ―しか　き―し（き―しか）
〈サ変〉せ―し　せ―しか　し―き
なお、「きしか」は一例しかないとされる。

④「けり」の口語訳
　i　過去　…タ
　　…タソウダ
　ii　詠嘆　…タナア
　　…コトダヨ

※⑤「き」と「けり」の違い

□　人、榎の木の僧正とぞいひける。　（徒然）

□　「犬などもかかる心あるものなりけり。」と笑はせ給ふ。（枕）

□　見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮　（新古今）

□　後徳大寺の大臣の、寝殿に鳶ゐさせじとて縄をはられたりけるを、西行が見て、……そののちはまゐらざりけると聞きはべるに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや縄をひかれたりしかば、かのためし思ひ出でられはべりしに、……　（徒然）

⬆「けり」は連用形接続。伝聞した事柄の回想に多く用いられる。また、会話文や和歌の中では詠嘆の意味を表す。

⬆上例では、前半の後徳大寺の大臣と西行の話（西行は一二世紀の人物）が伝聞したことを、後半の綾小路宮の話が作者の直接体験であることを示している。

識別1　「し」の識別

1　サ変動詞「す」の連用形	□　かしこの詩作りなどしける。 ＊あちらの漢詩を作ったりなどした。　（土佐）	⬆文節の先頭にあり、「す」に置き換えて切れる。
2　過去の助動詞「き」の連体形	□　昔ありし家はまれなり。 ＊昔あった家はまれである。　（方丈記）	⬆連用形（カ変・サ変は未然形）に接続。
3　強意の副助詞	□　名にし負はばいざ言問はむ都鳥 ＊都という名を持っているならさあ尋ねよう、都鳥よ　（伊勢）	⬆除いても意味が変わらない。

⑥「つ」「ぬ」の口語訳

i 完了…テシマウ…タ

ii 強意…テシマウ キット…

□ 秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。（竹取）

□ はや、舟に乗れ。日も暮れぬ。（伊勢）

□ このことかのこと、怠らず成じてん。（徒然）

□ 潮満ちぬ。風も吹きぬべし。（土佐）

□ あまた度入らむとするに、閉じ**つ**開き**つ**入ることを得ず。（今昔）

□ 白波の上にただよひ、浮き**ぬ**沈み**ぬ**しければ（平家）

□ その沢に、かきつばたいとおもしろく咲きたり。（伊勢）

□ 梶原、……やがて続いてうち入れたり。（平家）

□ 五月のつごもりに雪いと白う降れり。（伊勢）

□ 人をやりて見するに、おほかた会へる者なし。（徒然）

⬆「つ」「ぬ」は連用形接続。「つ」は、他動詞に付いて意志的・作為的な行為の完了を表し、「ぬ」は、自動詞に付いて無意識的・自然的に状態が移る様を表す傾向がある。

⬆下に推量の助動詞がくる場合強意を表す。（てん・ぬべし）

⬆《…つ、…つ》《…ぬ、…ぬ》と、終止形を重ねるかたちをとり、並列を表す。

⬆「たり」は連用形接続。この語源は、「て＋あり」。「り」の方は、「書き＋あり→書けり」「し＋あり→せり」と変化した「り」を取り出したもの。いずれも存続が原義。

※⑦ 並列の「つ」「ぬ」

⑧「たり」「り」の口語訳

i 存続…テイル …テアル

ii 完了…タ …テシマッタ

※⑨「り」の接続

□ 大小二の黒き犬を具せ**り**。（今昔）

□ かぐや姫は、罪をつくり給へ**り**ければ（竹取）

□ 夢てふものは頼みそめてき（古今）

□ 聖の馬を堀へ落としてけり。（徒然）

□ 一夜のうちに塵灰（ちりはひ）となりにき。（方丈）

□ その人、ほどなく失せにけり。（徒然）

□ からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。（徒然）

□ 伏せ籠（ご）のうちに籠めたりつるものを。（源氏）

□ 身を変へたるがごとなりにたり。（竹取）

□ つひにまはらで、いたづらに立てりけり。（徒然）

⑩〈過去〉〈完了〉の複合助動詞の口語訳

i 完了＋過去 …テシマッタ

ii 存続＋過去 …テイタ

⬆「り」の接続は特殊なので注意。**サ変の未然形・四段の已然形**にのみ接続する。（一説に、サ変・四段の命令形とする。）

⬆「…てき・…てけり」「…にき・…にけり」のかたちは、**完了＋過去**の例。「…たりき・…たりけり」「…りき・…りけり」のかたちは、**存続＋過去**の例。ほかに、「…にたり」「…たりつ」などもある。いずれも、できるだけ原義に即して口語訳するのがよい。